

【イギリス経済史・金融史・経営史・世界経済論】

英国金融・商業・産業の週刊誌

STATIST
スタティスト

第1—191巻/1878—1967年 ロンドン刊

Statist. A Weekly Journal for Economists and Men of Business. Vols. 1 – 191. London, 1878 - 1967. 35mm silver positive microfilm 163 reels. (Kyokuto Shoten, JP) <K06-176>

Vols. 1 - 98. London, 1878 - 1921. 79 reels. <K05-442>

Vols. 99 - 191 (last publ.). London, 1922 - 1967. 84 reels. <K05-443>

世界大恐慌の引き金となったニューヨーク株式市場のガラが始まった1929年10月24日、暗黒の木曜日'の翌々日の26日(土)のスタティスト誌に早速「ウォールストリートの破断」('Break in Wall Street')と題する主要記事が現れる。ガラは1927年以来の、ヨーロッパの金融再建支援の金利政策によってかつてなく引き延ばされたブームの帰結であること、ブームはヨーロッパの金融市場を緊張させたこと、ブームは「自らの行き過ぎの故に死に行く」('dying of its own excesses')ことなどが指摘される。世界恐慌の幕開けがいわばリアル・タイムで活写される。この後、「世界信用危機」(11/2)、「ニューヨーク発行ブームの余波」(11/2)、「証券大崩れ」(11/9)、「デフレーション」(「アメリカの話題」11/30)と続く。もちろん、内外の金融・財政・貿易・産業・会社業況等々の動向も伝えられる。スタティスト誌は、現代経済史研を志す人にとって、さまざまなデータとともに眼前に進行しつつある事態のすぐれた分析を提供してくれる、頼り甲斐のある味方である。

埼玉学園大学教授/明治大学名誉教授 森 恒夫

英国では1840年代に、最初の経済専門誌『エコノミスト』(1843年創刊)と最初の金融専門誌『バンカーズ・マガジン』(1844年創刊)を持っていました。これらの有力な先行誌に続いてヴィクトリア後期の1878年になって「エコノミストと実業家のための金融・商業・産業の'Independent Journal」『スタティスト』が創刊されました。既に強力な地歩を築いていた『エコノミスト』が、初期には「穀物法」反対を掲げて反政府的色彩を帯びていたのを意識して、あらゆる政治党派から自由な'Independent Journal を謳って発刊されました。創刊者は、経済学・金融・統計問題について多くの著作を残し、ジャーナリストとして『エコノミスト』の編集者、公職にも就いて「商務院」(Board of Trade)副総裁を務めたギッフエン(Sir Robert Giffen, 1837—1910)と金融政策と金融理論の著作を書いたロイド(Thomas Lloyd)の二人でした。

「統計的」分析に主眼をおいた「科学的」論調で、しばしば政府の政策を批判し、企業への規制緩和を薦め、特定の銘柄への株式投資をもアドヴァイスしています。こういった実践的な多くの記事が不況期に陥った19世紀末の英国で、当時の経済人の第一義的関心事となり、絶大な支持を得たといわれます。20世紀に入っても、その重要性は失われることなく、例えば、ケインズ批判の論文が本誌に掲載され、それに対するケインズの反論も知られています。

国内の所蔵が極めて限られている貴重な本資料のマイクロフィルム版の刊行です。

発売元 極東書店